

航路なき旅

——伊太利亜王国海軍の艦隊と明治初期日本人の伊太利亜観——

デマイオ・シルヴァーナ

1. はじめに

1866年に、日伊修好通商条約¹⁾が締結されて以後の日伊関係については、数多くの先行研究が残されている。しかし、今日まで活用されてきたイタリア側の文献資料はおもにローマにある「国立公文書館 (Archivio di Stato Centrale, ASC)」もしくは外務省「外交歴史文書館 (Archivio Storico del Ministero Affari Esteri, ASMAE)」で保管されているものをもとにして書かれたものである。いっぽう、1868年以降イタリアで出版されている『リヴィスタ・マリッティマ [海軍雑誌]』(Rivista Marittima)に掲載されてきた日本に関する海軍司令官報告書や諸論文などは、いくつかの先行研究²⁾において引用されてはきたものの、当時の日本の状況に関して体系的かつ分析的に記述されたものとはいい難い。さらに、海軍関係者の手による文献資料が部分的に残されている「海軍歴史文書館 (Archivio Storico della Marina Militare, ASMM)」所蔵資料についても、かつて専門的調査が実施されてきた形跡を認めることができない。

以上のことから本論文では、はじめに伊太利亜王国海軍の黎明期における海洋遠征について概観し、ついで当時の日本における王国海軍のあり方を『リヴィスタ・マリッティマ』誌の資料を参考に探りながら、また開港・開市以外の王国海軍の士官・乗組員による訪問地での出来事を交えて、明治開国期の日本人によるイタリア人のイメージについて考察することにした。

2. 伊太利亜王国海軍の黎明期と海洋遠征

G. ガリバルディによる1860年のシチリア遠征後、サルデーニャ王国、トスカーナ大公、両シチリア王国の海軍合併が行われ、1861年トリノで伊太利亜王国海軍が成立することになった。イタリアの国家統一に貢献し、初代の首相兼海軍大臣に就任したC.B. カヴールが伊太利亜王国海軍省での演説で同軍の強化を主張するも、1866年イタリアはヴェネト地方の回収を巡る対オーストリア戦（第三次独立戦争）において7月20日クロアチア南部のスプリトより50マイルほど離れたリッサ島海戦で破れ、同海軍をはじめイタリア全土に大きな衝撃を与えることとなった。

当時の日伊関係は、1866年から1873年までの「通商時代」、1873年から1896年までの「黄金時代」に通常大別されるが³⁾、ここでとくに通商関係面で注目すべき点は、当時イタリアでは蚕糸業が蚕体病気の蔓延による大きな被害下にあり、海外から良質の蚕種を輸入するの必要に迫られていたことである⁴⁾。王国海軍が日本へ海洋遠征を開始した理由は、まさに日本から蚕種輸入を図るために日伊修好通商条約を締結することになった。当時一等総領事で、後にイタリア

地理協会会長になったクリストフォロ・ネグリに果たされた役割は、すでに先行研究において十分検討されてきたので、ここでは詳細を省略する。

日本に来航することになるコルヴェット型軍艦マジェンタ号は、当初南米ラ・プラタ河口モンテビデオ港にあったが、V.F. アルミニオン艦長のもと急遽日本に向けて出航し、リッサ島海戦数日前にようやく東京湾入港を果たすことになる。そして日本到着後間もなくアルミニオンが日伊修好通商条約締結のための交渉を開始したことは、ご承知の通りである。

いずれにしても、ここで問題としたい点は、条約締結後に日本に来航することになる王国海軍艦が通商目的以外の意図があったかどうか、また当時の日本人の目から捉えられたイタリア人のイメージとはいかなるものであったのか、検討してみたい。

3. 『リヴィスタ・マリッティマ』にみる伊太利亜王国海軍と日本 (1860年代後半～70年代)

つぎに十九世紀の60年代後半から70年代にかけての伊太利亜王国海軍の日本へのおもな海洋遠征を表でまとめてみた⁵⁾。

年*	軍艦名	艦長(その他)**
1866 (1866-1868)	マジェンタ号	V. F. アルミニオン (中佐)
1868-1869; (1868-1871)	1870 プリンチベッサ・クロティルデ号	C. A. ラッキア (大佐)
1871; (1871-1873) (第1回目)	1872 ヴェットル・ピサーニ号	G. ロヴェーラ (ディ・マリア) (中佐)
1873 (1872-1874)	ガリバルディ号	A. デル・サント (大佐) ジェノヴァ公侯トマソ・ディ・サヴォ イア殿下は艦内 (少尉)
1873 (1872-1874)	ゴヴェルノーロ号	E. アッチンニ (中佐)
1874; (1874-1877) (第2回目)	1875 ヴェットル・ピサーニ号	A. デ・ネグリ (中佐)
1877 (1877-1879) (第1回目)	クリストフォロ・コロombo号	N. カネヴァロ (大佐)
1879-1880; (1879-1881) (第3回目)	1881 ヴェットル・ピサーニ号	ジェノヴァ公侯トマソ・ディ・サヴォ イア殿下 (中佐)

* 日本での滞在期間。丸括弧内は世界一周にかかった時間。

** 太字は艦長名。また、丸括弧内は職位。

これら日本に寄港した船舶は、その後数ヶ月をかけ、太平洋 (図1)、もしくはインド洋経由で、本国へ帰還していた。

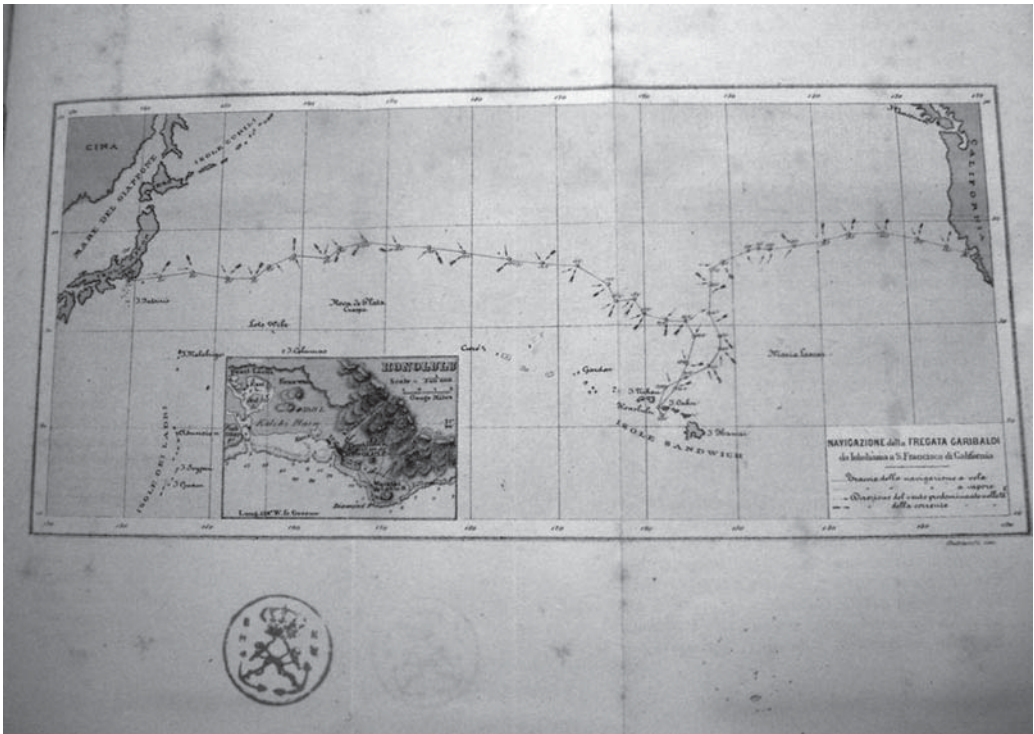


図 1: 太平洋航路（『リヴィスタ・マリッティマ』, 1874, 3, p. 200 より）

先ほどの質問に答えられるには『リヴィスタ・マリッティマ』誌を紐解くことで、これらの疑問を解くためのいくつかの端緒をつかむことができる。

いうまでもなく、当時イギリス、フランスなどは軍艦だけではなく、商船も極東地域に派遣していた。それに対し植民地政策で遅れをとっていたイタリアが造船開発において欧州列強国を追随しようとするも、その技術レベルの差は歴然としていた。極東地域まで航海可能な船舶ははまだ王国軍艦のみで、商船どころかその軍艦さえ 1867 年に海軍省の委員会が調査した結果（図 2）海軍大臣リボティ（図 3）がリッサ島戦の敗因を汽罐ではなく帆式木造艦隊が中心であった事実に帰すなど、造船技術の観点からみても大幅に立ち遅れていた。当時のイタリアは、通商業務においてすら商船でなく軍艦を活用しなければならなかったのである。

ただここで忘れてはならないのは、軍艦は、たんにその装備・戦闘能力においてのみ評価されるのではなく、その象徴的意味において存在する、という点である。国旗掲揚した武装戦艦は、それを見る者に強烈な印象を与えるに違いないのである。1869年アルミニオンは日本を以下のように描写している（翻訳原文まま）。

「われわれの軍艦は午前十一時に浦賀水道に入った。そらは明るく晴れ渡り、海はこの上なく穏やかだった。漁師の小舟その他の多数の舟が、折からの軟らかい海風に薄い蓆旗のような帆を膨らませながら、いつとき、われわれの軍艦の後方にあった。

マジェンタ号は三つの汽罐の力で走り、海岸の村落、寺、お堂、林などが次々に現れては後方に消えていった。しかし、ヨーロッパの大きな港町近辺に見るような変化に富んだ景観はまるで見られなかった。ヨーロッパでは、港町の付近一帯には、数多くの民家、大きな館、芸術的な公共建築物が並んでいて、活気に満ちた社会のあることを遠くから示し、自然に対する人間の絶対的な力を誇示している。ところが日本では、田畑や木立、小さな庭などが見られるだけで、大きなアーチ、水道橋、美しい町並みや街道などは、まるで見られない。」⁶⁾

面白いことで、『リヴィスタ・マリッティマ』の記事をみていくと、当時の日本人が戦艦だけでなく、ときにイタリア人そのものにも恐怖心を抱いていた様子がうかがえる。1872年にG.ロヴェーラ艦長率いる軍艦ヴェットル・ピサーニ号が、日本に到着した。ロヴェーラは当時の様子を以下のように綴っている。

「三島灘にある脇浜の投錨地はとくに大砲の射撃練習に相応しいと思い、千メートルないし二千メートルの距離から56回発射した。…（中略）…翌日には、伊予灘のミナシ島を回りながらまた大砲で21回も発射し、完璧にできたとは言いがたいが、もしもその島が敵船ならば、射抜くことができただろう。」⁷⁾

当時、伊太利亜王国海軍には3ヶ月に1度の砲撃練習が義務付けられていたが、砲撃訓練であろうと礼砲であろうと、その様子を目にする日本人に何らかの恐怖心を与えたことは想像に難くないだろう。王国海軍の艦船、商船としての役割を果たしつつも、日本人の目には、まぎれもなく軍艦そのものとして映し出されていたに違いない。

さらにまた、その射撃訓練が瀬戸内海（図4）の三島灘、伊予灘で行われたことにも、十分に注目する必要があると思われる。というのも、1870年に日本にあったプリンチベッサ・クロティルデ号艦長のC.A.ラッキアが『リヴィスタ・マリッティマ』に掲載した報告にも書いたように、当時日本において外交交渉の中心地は「江戸に近い横浜」であったからである。じじつラッキア自身、「実際に航路の中心、そして経済的、政治的な中心は大阪・神戸沖周辺であった」と鋭く指摘しているし、また「もしも、海洋に精通する者が日本沿岸のどの港を国際関係上、重視すべきか決めるなら、瀬戸内海沿岸を選ぶに違いない」とまで書いている⁸⁾。つまり、発射訓練に太平洋側沿岸の島ではなく、あえて瀬戸内海の中心に位置する島を選んだこと自体、偶然と

いうより意図的であったと考えられなくもないわけである。



図 4: 瀬戸内海

(『リヴィスタ・マリッティマ』, 1870, 1, p. 33 より)

4. 開港・開市以外に伊太利亜王国海軍の士官、乗組員が訪れた場所

伊太利亜王国海軍は条約に基づく開港地（神奈川，箱館，長崎）以外にも，湾岸測量を行いつつ入港可能な地点を探索していた。軍艦ヴェットル・ピサーニ号のデ・ヴェッキ大将は下士官に水路学を教えながら脇浜の図面を制作している。脇浜に上陸した外国人は彼らが初めてではなく，すでに1868年にイギリスのオチェアン号が投錨していたが，図面制作（図5）を進めていたイタリア人は日本人たちから大いに歓迎され，乗組員たちはそれら日本人に艦内見学までさせている。日本人たちの鋭い質問に圧倒されたと回想するロヴェーラ艦長は，下士官の淡路島・三原での訪問について興味深い指摘をしている。

「三原に住む日本人は外国人に多大な関心を示すところからみて，三原の住民は初めてヨーロッパ人に出会ったと推測される。イタリア人の士官が綿の商売で繁栄していた三原の目抜き通りを歩いたとき，前も後ろも日本人がついてきたが，全部で千人はいたであろう。三原を見学することを事前に町の人に連絡していたわけではなかったのに，それら日本人は誰かに命じられて我々イタリア人を歓迎していたわけではなかった。」⁹⁾

航路なき旅（デマイオ）

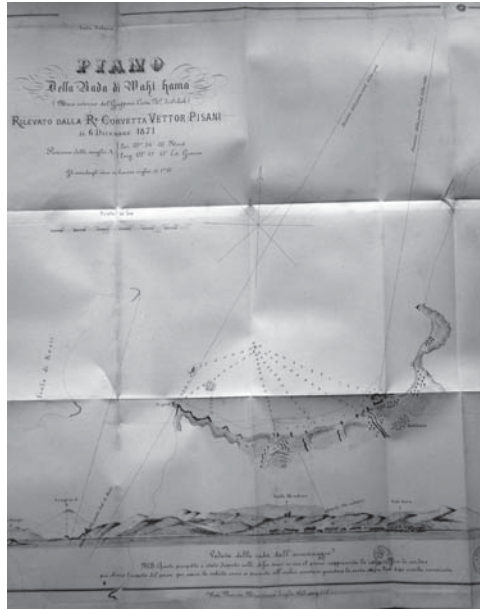


図 5: 脇浜の図面

(『リヴィスタ・マリッティマ』, 1872, 4, p. 157 より)

開港・開市でなかった「Yamada」という地名の付けられた場所について、ゴヴェルノーロ号のアッチンニ艦長による記録に基づきのような記述がある。

「入り江には小さな日本の汽罐船があった。ポルチェッリ大尉と少尉の努力にもかかわらず、日本人と意思疎通できなかつたため、その舟がそこで何をしていたのかはまったく分からなかつた。その入り江については横浜で何人かの外国人の全権大使が話していた。しかし、小さな入り江なので大きな舟が入れない。さらにまた、海岸には小さな村しかなく、商売に適していないと思われる。そこからさらに6マイルほど離れた場所にある仙台市の方がある程度商業が発達しているため、面白いかもしれない。」¹⁰⁾

5. おわりに

以上明治初期の伊太利亜王国海軍による海洋遠征にみる日本とイタリアとの《出会い》についてみてきた。ここで参照した資料は、いずれもイタリア側から“テキスト”として記述された見聞録である。《出会い》には、つねに相互交換の眼差しがある。その意味で、今回の資料はあまりにも限定的なものであるといつてよいだろう。しかし、今回ここでおこなった議論を出発点に、日本側において記述された文献資料を比較考量することで、明治初期の開国当時の異国人との《出会い》を再構成していくことは、歴史的出来事の今日に与える意味を見出すためにも必須の作業となるだろう。今回提起された課題は、その意味で日伊両国の共同研究の出発点の一つと思われる。

資料 1

『リヴィスタ・マリッティマ』

日本に関する海軍司令官報告書や諸論文など (1868-1878)

1868

“Giappone. Costa Nord di Nipon”, *Rivista Marittima*, 1868, p. 204.

“Bastimenti a bussola giapponesi”, *Rivista Marittima*, 1868, pp. 800-802.

1869

Il Giappone e il viaggio della Magenta di Arminjon, *Rivista Marittima*, 1869, 1, p. 244.

1870

C. A. Racchia, “Traversata della Corvetta *Principessa Clotilde*. Da Yokohama a Shanghai”, *Rivista Marittima*, 1870, 1, pp. 20-36.

“Notizie commerciali intorno al Giappone”, *Rivista Marittima*, 1870, 1, pp. 314-315.

“Scuola navale giapponese”, *Rivista Marittima*, 1870, 3, p. 1830.

1871

(C. A. Racchia), “Cronaca e notizie varie: brani di un rapporto del Comandante della R. Pirocorvetta *Principessa Clotilde* sul nuovo tremendo tifone avvenuto nella notte del 12 al 13 ottobre nella rada di Yeddo”, *Rivista Marittima*, 1871, 1, pp. 2568-2570.

“Sunto del rapporto dell' Ammiraglio Rodgers, Comandante la squadra Americana nei Mari della Cina e del Giappone, sui combattimenti avvenuti nella spedizione di Corea” (da *Navy and Army Journal*), *Rivista Marittima*, 1871, 4, pp. 1157-1161.

1872

G. Lovera, “Rapporto di campagna da Hiogo a Nagasaki”, *Rivista Marittima*, 1872, 3, pp. 770-782.

R. Corvetta Vettor Pisani, Giornale di bordo (l' Ufficiale di rotta C. Grillo), *Rivista Marittima*, 1872, 3, pp. 968-9.

“Il Principe Takahiko”, *Rivista Marittima*, 1872, 3, p. 973.

“Traccia della navigazione compiuta dalla Reale Corvetta Vettor Pisani. –fra Nagasaki e Shanghai-”, *Rivista Marittima*, 1872, 3, p. 988.

“Notizie sui porti visitati dalla Corvetta Italiana *Principessa Clotilde* comandata dal Capitano di Fregata Comm. C. A. Racchia negli anni 1868-69-70-71 compilate dal sottotenente di vascello Angelo Chionio”, *Rivista Marittima*, 1872, 3, pp. 1091-1100.

G. Lovera, “Rapporto di navigazione fra Singapore e Ilo Ilo”, *Rivista Marittima*, 1872, 4, pp. 3-11.

(da *Nautical Magazine*, agosto 1872) “Regia Marina Giapponese modellata sulla Marina Inglese”, *Rivista Marittima*, 1872, 4, pp. 106-110.

(da *London and China Express*, 19 luglio 1872) “Armamenti navali giapponesi”, *Rivista Marittima*, 1872, 4, pp. 136-137.

G. Lovera, “Rapporto di navigazione nelle isole Filippine, e fra esse ed il Giappone. Secondo approdo”, *Rivista Marittima*, 1872, 4, pp. 373-394.

G. Lovera, “Rapporto di stazione in Yokohama per il mese d' agosto”, *Rivista Marittima*, 1872, 4, pp. 393-394.

1873

G. Lovera, "Rapporto di stazione in Yokohama pel mese di settembre e prima metà di ottobre 1872", *Rivista Marittima*, 1873, 1, pp. 52-55.

Carini Alfonso, "La Compagnia "Peninsular and Oriental. Traversata da Yokohama a Brindisi", *Rivista Marittima*, 1873, 1, pp. 99-106.

(Estratto dal *Japan Gazette*) "Sentenza del Saibanscio di Kanagawa. Tratta di coolies", *Rivista Marittima*, 1873, 1, pp. 268-278.

G. Lovera, "Dal Giappone alla Nuova Guinea ed alle Molucche. Notizie dei viaggiatori Beccari e d' Albertis", *Rivista Marittima*, 1873, 2, pp. 32-42.

1874

E. Accinni, "L' isola di Yesso ed il porto di Hakodade", *Rivista Marittima*, 1874, 1, pp. 544-557.

"Una convenzione per la navigazione nel Pacifico fra il Giappone e gli Stati Uniti", *Rivista Marittima*, 1874, 2, p. 335.

A. Del Santo, "Traversata dal Giappone all' alta California", *Rivista Marittima*, 1874, 3, pp. 195-203.

Enrico Accinni, "Cenni sul Commercio dei principali porti del Giappone. Notizie raccolte intorno al presente stato dell' impero", *Rivista Marittima*, 1874, 3, pp. 378-428.

F. Fiorani, "Note di patologia geografica, statistica, medica e di zoologia. [Paragrafo] Giappone", *Rivista Marittima*, 1874, 4, pp. 306-311.

Zanetti e Giglioli, "Istruzioni scientifiche pei viaggiatori. Antropologia ed etnologia", *Rivista Marittima*, 1874, 4, pp. 339-363.

"La vendita della corazzata Danemark e il governo giapponese", *Rivista Marittima*, 1874, 4, p. 383.

1875

"L' isola di Formosa e la spedizione giapponese", *Rivista Marittima*, 1875, 1, pp. 339-341.

"Notizie della Corvetta "Vettor Pisani", *Rivista Marittima*, 1875, 3, pp. 304-306.

"Notizie della Corvetta "Vettor Pisani", *Rivista Marittima*, 1875, 3, pp. 443-446.

"Cronaca. Notizie della Corvetta "Vettor Pisani", *Rivista Marittima*, 1875, 4, pp. 156-157.

1876

"Carbon fossile al Giappone", *Rivista Marittima*, 1876, 1, p. 139.

"Corvetta giapponese", *Rivista Marittima*, 1876, 1, pp. 139-140.

"Cronaca. Notizie della Corvetta "Vettor Pisani", *Rivista Marittima*, 1876, 2, pp. 96-102.

"Krupp e Armstrong al Giappone", *Rivista Marittima*, 1876, 2, pp. 120-121.

"Bibliografia: Enrico Hillyer Giglioli, *Viaggio intorno al globo della R. Pirocorvetta Magenta, con una introduzione etnologica di P. Mantegazza*. – Milano, V. Maisner e C. editori, *Rivista Marittima*, 1876, 3, pp. 214-215.

1877

"Una corazzata giapponese", *Rivista Marittima*, 1877, 2, pp. 548-549.

"Contribuzioni alla meteorologia del Giappone", *Rivista Marittima*, 1877, 3, pp. 314-319.

"Bibliografia: *Tre anni a bordo alla Vettor Pisani (1874-1877)* di Luigi Graffagni, Luogotenente di vascello – Genova, tipografia del R. Istituto Sordo-Muti, 1877", *Rivista Marittima*, 1877, 3, p. 486.

“Notizie del “Cristoforo Colombo” da Hong Kong a Yokohama”, *Rivista Marittima*, 1877, 4, pp. 134-140.

“Perdita di una corazzata giapponese”, *Rivista Marittima*, 1877, 4, p. 486.

1878

“La stampa nel Giappone”, *Rivista Marittima*, 1878, 1, p. 343.

“Navigazione italiana al Giappone”, *Rivista Marittima*, 1878, 1, p. 345.

“Corazzate giapponesi”, *Rivista Marittima*, 1878, 2, pp. 472-474.

“La cannoniera giapponese ‘Seiki’”, *Rivista Marittima*, 1878, 3, pp. 335-336.

謝辞

本論文の作成にあたっては、早稲田大学の土屋淳二教授から貴重なご助言をいただきました。この場をお借りして、お礼を申し上げたいと思います。それから、『リヴィスタ・マリッティマ』を保管しているナポリのバルテノベ大学（元の商船大学）附属図書館のマイエッロ・ローサ館長（Direttore Rosa Maiello）及びフィオリ・マリアロッセッラ司書（Sig.ra Maria Rossella Fiori）に、心より感謝の意を表します。なお、本論文中不適切な記述及び誤謬があった場合、それは執筆者に責任を帰するものです。

注

- 1) 「以太利條約佛文翻譯」（東京）国立公文書館 2A 33-9, 単 110(2).
- 2) GUEZE Raoul, “Fonti archivistiche per la storia delle relazioni italo-giapponesi. Elementi di ricerca”, in *Lo stato liberale italiano e l’età Meiji. Atti del I Convegno Italo-Giapponese di studi storici (Roma, 23-27 settembre)*, Roma, Edizioni dell’Ateneo, 1987, pp. 198-201; pp. 213-214. PUDDINU Paolo, *Un viaggiatore italiano in Giappone nel 1873 (il “Giornale particolare” di Giacomo Bove)*, Sassari, IEOKA Editore, 1998.
- 3) UGOLINI Romano, “I rapporti tra Italia e Giappone nell’età Meiji”, in *Lo stato liberale italiano e l’età Meiji. Atti del I Convegno Italo-Giapponese di studi storici (Roma, 23-27 settembre)*, Roma, Edizioni dell’Ateneo, 1987, p. 133.
- 4) ZANIER Claudio, *Semai. Setaioli italiani in Giappone (1861-1880)*, Padova, Cleup, 2006.
- 5) 表は Ufficio Storico della Marina Militare (a cura di), *Storia delle campagne oceaniche della R. Marina*, vol. I, Roma, ed. 1936, rist. 1992 に基づき、作成されたものである。
- 6) V.F. アルミニヨン（著者）、大久保昭男（訳者）『イタリヤ使節の幕末見聞記』東京 新人物往来社 1987 p. 32-33. 原題：V.F. Arminjon, *Il Giappone e il viaggio della corvetta Magenta nel 1866*, Genova, 1869.
- 7) G. Lovera, “Rapporto di campagna da Hiogo a Nagasaki”, *Rivista Marittima*, 1872, 3, p. 778.
- 8) C. A. Racchia, “Traversata della Corvetta Principessa Clotilde. Da Yokohama a Shanghai”, *Rivista Marittima*, 1870, 1, pp. 23-24.
- 9) G. Lovera, “Rapporto di campagna da Hiogo a Nagasaki”, *Rivista Marittima*, 1872, 3, p. 777.
- 10) Archivio Storico Marina Militare (ASMM), cart. 2159, Yokohama, 7 ottobre 1873, R.a Corvetta “Governolo”. N. 219 indirizzato A S.E. il Ministro di Marina, Roma.